

2016年12月25日 礼拝メッセージ

聖書：イザヤ書 61 章 1～11 節

説教：わたしを遣わされた

これまでのあらすじ

### 1) イザヤの時代

この四週間、イザヤ書を開きながら待降節を過ぎてまいりました。これまでのあらすじをふり返ります。

ダビデがイスラエルを一つの国にまとめ、その息子ソロモンがエルサレムに神殿を建設するほどに国は栄えました。しかしやがてこの国は北と南の二つの王国に分裂し、その北王国はアッシリヤに滅ぼされてしまいます。残った南王国もいつアッシリヤが襲ってくるか、それが明日なのか一年後なのかはわかりませんが、必ず来るとことだけはわかっています。きょうどんなに一生懸命働いても、きょう努力して正しく生きようとしても、敵が襲ってきたらすべては終わりです。バラ色の未来を思い描くことができません。生きる希望が失われていきます。正直に生きることが無駄のように思えてきます。むしろ、どうせ死ぬのだから人をだまし、人のものを奪ってもいいじゃないか。このように荒れすぎんだ心が人々を支配し、暗やみにおおわれていきます。そんな時代にイザヤが神のことばを語り、人々を励ましていきます。

### 2) 主にそむいた私たち

彼は何を語ったのか。三つありました。一つ目。59 章 13 節。「私たちは、そむいて、主を否み、私たちの神に従うことをやめ、しいたげと反逆を語り、心に偽りのことばを抱いて、つぶやいている。」この世が真つ暗闇になったのはなぜか。あなたがたは、敵であ

るアッシリヤが悪いとか、政治が悪いとか、すべての責任は自分以外の誰かにあると言っているけれど、全くの的はずれである。あなたにこそ問題がある。そこにどうして目を向けないのか。心で嘘偽りを語っている私たちが、どのようにして平和を作れるというのか。主にそむいた結果、この世界はやみに閉ざされてしまったのだ。これが一つ目です。

### 3) 主がとりなす

二つ目。こんな私たちを神はどのようにご覧になったか。59 章 16 節。「主はこれを見て、公義のないのに心を痛められた。主は人のいないのを見、とりなす者のいないのに驚かれた。そこで、ご自分の御腕で救いをもたらし、ご自分の義を、ご自分のささえとされた。」

この世界に光を取り戻すためには、神と人間との間に立ちはだかつている罪という壁を取り払わなければなりません。とりなす者がいるなら、神と人間との間に入って、その壁を取り払ってくれるのだが、どこを見てもとりなすことが出来る者はいない。そこで神ご自身がとりなす者にならなければと決心されます。それが二つ目でした。

### 3) 贖い主が来られる

そして三つ目。59 章 20 節です。「しかし、シオンには贖い主として来る。ヤコブの中のそむきの罪を悔い改める者のところに来る。」その方が私たちの光となられるので、あなたがたはその方を待ち望みなさい、とい

ザヤは語りました。

さて、本当に来られたのでしょうか。口で語るだけなら何とでも言えます。もし、語ったとおりにならなかったのなら、聖書を読む価値はありません。神を信じるなどばかげています。でも私たちは聖書を読み、神を信じると言っています。なぜか。イザヤが語ったとおりに、贖い主がイスラエルに来られたからです。神はあの約束はなかったことにしよう、と勝手に破ったりしない。語った約束を必ず守ることがわかる。だから聖書に書いてあることを信じられるわけです。

では、イザヤが語ったことばがどのように実現していったのかを、これから見て参ります。

## 2 きょう実現した（ルカ4章18、19節）

### 1) イザヤ書を読み上げるイエス

1節。「神である主の霊が、わたしの上にある。主はわたしに油を注ぎ、貧しい者により知らせを伝え、心の傷ついた者をいやすために、わたしを遣わされた。捕らわれ人には解放を、囚人には釈放を告げ、主の恵みの年と、われわれの神の復讐の日を告げ（知らせるために）。」

ルカの福音書4章には、イエスがご自分の故郷であるナザレの会堂で、今朝開いているイザヤ書61章1、2節を人々の前で読み上げたことが書かれています。イザヤ書を読み終えたイエスは、人々にこう語りました。「きょう、聖書のこのみことばが、あなたがたが聞いたとおりに実現しました。」

### 2) 故郷から追い出されるイエス

会堂にいた人々は、イエスのことを小さいときから知っています。急にイエスが村から

いなくなり、どうしたのか心配していたら、どうもあちこちで不思議な奇蹟を起こしているとうわさが聞こえてきました。こんどイエスが帰ってきたら、うわさが本当かどうか確かめよう。奇蹟を見せてもらうことにしよう。ナザレの村の人々の間でそんな話が出ていたとき、イエスがひょっこりと戻って来ました。人々は会堂に押しかけて来てイエスがなにかをするのではと期待の目で見ています。ところがイエスはこう言うのです。「預言者は誰でも、自分の郷里では歓迎されません。」つまり、あなたがたの目の前では奇蹟はなにも起こしません。にべもなく断ってしまったのです。これを聞いて怒ったのは、会堂にいた人たちです。こんな男は丘の崖の上から突き落としてやる。そんな険悪な雰囲気さえなってしまうました。

イエスは どうしてこんなことを言うのでしょうか。人が怒るようなことを言わずに、もっと穏やかに言えばよかったはずですが、でもイエスは意味もなく人を怒らせるようなことをするはずはありません。昨年クリスマスイブ礼拝の中で、シメオンが語ったことばを見ましたが、シメオンはマリヤにこう語っていました。「(幼子イエスは、) 反対を受けると定められている。」

しばしば、イエスは人々の心の中にある本当の思いを表に吐き出させるように挑発するようなことを語ることがあります。人の心の中に何があるのか。そこに良いものがあるのか。イザヤは言いました。しいたげと反感を語り、心に偽りのことばを抱いて、つぶやいている。つぶやいている限り隠されたままです。でもこれを表に出したら、どんなことばになるか。神のひとり子であるイエスを殺すことばになります。挑発するように語るイ

エスが意地悪なのではありません。人の心が意地悪なのです。結局、イエスは故郷から追い出されてしまいました。

### 3 イエスが喜ぶ (61:10~11)

#### 1) とりなす者となる

そんなふうにしてこの方は、最期はご自分が造られたこの世界から追い出され、十字架に追いやられていきました。でもそれは予想外の出来事ではない。計画通りにこの方は殺されていった。なぜこの方が殺されるのが、救いなのでしょう。神はなんと言われたのか。「とりなす者いないことに驚かれた。そこで、ご自分の御腕で救いをもたらした。」とりなす者は何をするのか。神に向かってこう言うのでしょうか。「父なる神様。人間たちの罪をなかつたことにし、赦して上げてください。」

#### 2) ご自分の義をご自分ささえとする

でも神はこうも言われたのです。「ご自分の義を、ご自分のささえにされた。」義であることは絶対です。犯した罪は絶対にさばかなければならない。それが神の義です。その義をご自分のささえにされる。ということは、どうなるか。私たちの罪は水に流して終わるようなものではありません。きっちり精算しなければなりません。どうやって精算をするのか。私たちにはとても払えない。だれかに払ってもらうしかない。誰かが身代わりとなってさばきを受ける必要があります。それをしてくださったのがイエスでした。ということは、「ご自分の義をご自分のささえとされた」と言われたその意味は何であったのか。神がいのちを捨てるという覚悟を述べていたこととなります。

#### 3) 大いに楽しみ、喜ぶ

そこまでして神が私たちを救おうとされると聴き、ある方は警戒するかもしれません。そんなうまい話はない。神は十字架で苦しんだではないか。そのうらみつらみをきつと後で私たちにぶつけてくるのではないか。ちょっと、ひねくれた見方かもしれません。でも、安心していただきたい。確かに神は十字架で苦しみました。でも聖書はなんと言っているか。10節「わたしは主によって大いに楽しみ、わたしのたましいも、わたしの神によって喜ぶ。主がわたしに救いの衣を着せ、正義の外套をまといせ、花婿のように栄冠をかぶらせ、花嫁のように宝玉で飾ってくださいからだ。」

ここの「わたし」がひらがなになっていることに注意してください。これは神である方を表しています。文脈をたどれば、楽しみ喜んでいるのは救い主なる方だとわかります。主が私たちの罪を背負われたとき、もちろん大きな苦しみを味わうのですが、決して私たちをうらんだのではない。むしろ喜んでおられた。なぜ喜ぶのでしょうか。「わたしに救いの衣を着せた。」イエスは、父なる神がご自分を救ってくれたことを喜んでいのでしょうか。

でも、イエスは人となられたのです。十字架でさばかれましたが、この方を通して救いが十字架にあることを教えてくれた。どうやって。三日目によみがえられたことを通してです。ご自分がよみがえったから喜んでいるわけではありません。これで、主の十字架の下に来る者が救われる。その道が完成したから。もうだれも邪魔する者はいない。だから喜んでおられます。

その十字架に私たちは招かれています。イザヤの口を通して語ったとおりに主がなしてくださったことを覚えて、御名をあがめたいと願います。